

ジンメルの「支配」論について

河 原 三 津 子

はじめに

すべてがまったく対等な社会は存在しない。かならず上位と下位の関係がある。この関係は「支配関係」と考えられるが、「支配関係」といったばあい、上位の者が下位の者を規定する作用しか注目しないことが多い。

ジンメルは『社会学の根本問題』のなかで「社会とは個人間の相互作用であるといえらるゝとすれば、この相互作用の諸形式を記述することは、『社会』のもっとも狭い意味でかつもっともほんらいの意味で用いた社会（にかんする）科学の課題であろう」と述べている。つまり、彼は、社会を個人間、個人と集団、集団間の相互作用から考えようとしているのである。

社会学で扱う支配関係も同様である。彼は、『社会学』の第三章上位と下位の冒頭で「一般的にいえば、だれにとつても重要なことは、自己の影響が他人を規定するというのではなく、むしろこの影響が、すなわち他者にたいするこの規定が、規定するものである自己にたいして反作用をおよぼすということである」と述べている。⁽²⁾そこで、相互作用を重視したジンメルが、表面的には一方的な関係のように思える支配関係をどう社会的に考えたのかみていきたい。

つぎに、ジンメルは、支配を個人によるもの（個人支配）、集団によるもの（多数支配）、客観的な力によるもの（原理による支配）に分けている。そのなかで、個人支配を、服従関係一般の原型であり、根本的な形式で、典型的な現象としている。彼は、多数支配は支配者が個人から集団にかわつただけであるし、原理による支配もその前段階に暫定的なもの

として個人支配があるとみなしたり、逆に、個人のかわりに原理が用いられていると解釈している。つまり、ともに個人支配が軸になっていることから、支配のなかでもとくに、個人支配をとりあげて考察していきたい。

そのため、まず第一章で、服従者側からの作用を明らかにして支配関係が相互作用の関係であることを証明し、第二章で、支配の内容について考えてみようと思う。

第一章 相互作用としての支配関係

第一節 服従者からの作用

ジンメルは、支配を社会学的なものと認める初期段階で、支配の主体が、自己の意思の結果として他者にあらわれた状態に満足するという支配欲⁽²⁾の存在をしめした。しかし、権力の効果をもっぱら意識するこの段階では、社会化は存在しない。彼は、このことを「美術家と彫像⁽³⁾」の関係をあげて、つぎのように説明している。美術家が、ふつうの石をあちこち彫ったり、削ったりして、人間の彫像をつくるとする。彼は、それによって石を人間のかたちにかえる。だが、その彫像は美術家にたいして創造力を意識させることはあるが、影

響をおよぼすことはない。つまり、この段階は、なにかをつくる人とその作品という関係によって象徴されるのである。作品は「人」でなく「物」である。そうすると、「物」にたいする作用を社会学としてとりあげることができないのと同様に、ここで支配の社会学性を述べるのは、まだ十分ではない。

そこで、ジンメルは、支配欲の実際の意義を四つあげた。⁽⁴⁾一つめは、他人の利用の可能性をただ意識するだけ、二つめは、服従者の内面的な反抗を打破することを強く望んでいること、そのために三つめは、他者にたいしてつねにある種の関心をもっていること、そして四つめは、他者を価値のあるものとしていることである。

ところが、この内容とまったく逆なのは、利己主義である。利己主義も四つの点があげられており、⁽⁵⁾一つめは、他者のもついっさいの固有の意義をまったく排除していること、二つめは、服従者の外面的な反抗にたいする勝利だけが重要なものであること、そのために三つめは、他者をまったくどうでもよいものと考えていること、そして四つめは、他者を超越した目的のためのたんなる手段にすぎないと考えていることである。彼は、利己主義から生じる作用は、「家具師とかんな台⁽⁶⁾」との関係のようだと言っているが、まさにこれ

は、「人」と「道具」の関係と考えられる。他者を「道具」と同じように扱うことは、相互作用からとらえた支配ではない。

もう一つ、ジンメルは、相互作用からとらえた支配から区別されるものに、「直接的な物的な暴力の行使」⁽⁷⁾をあげている。この暴力は、強制と等しい。警察がある人を逮捕する時を例にとってみると、その人が罪を犯した、法に反する行為をしたという前提を無視するばあい、警察のとる行為は、逮捕される人がどういった意思をもっているかとは、まったく関係のないものであり、その人は、警察によって一方的にしかるべきところへ連れていかれるのである。このように、他者の自由をまったく排除していることは、本章の最初に述べた他者を「物」と考えているのと同じである。

しかし、通俗的な表現としては「強制」とか「選択の余地がない」とか「無条件な必然」という概念がよくつかわれる。だが、現実には、広義の支配関係のなかで、いっさいの自発性を排除することは稀である⁽⁸⁾とされている。だから、さきの、ある人を逮捕する例でも、国家と人びと（国民）との間には罪を犯せば、それからのちの自由は保障されないという約束ごとがあつて、それを守るか、守らないかという自由が残されているといえる。

ゆえに、服従者の自由はまったく認められていないと思われるような支配関係でさえも、かなりの程度の自由がつねに保障されており、われわれがその自由を意識していないだけだと述べられている。これは、自由の実現される範囲がゼロに近づいたとしても完全にはゼロにならないことをしめしている。

服従者の自由としては、「自発性」と「協力性」をあげている。⁽⁹⁾自発性とは「人間が自分自身の意思にもとづいて能動的に行動し、新しいものをみずからつくりだす」⁽¹⁰⁾ことである。協力性は「共働性」ともいわれ、⁽¹¹⁾共働とは「社会内において非統合状態にある集団、または個人が、相互適応によって統合されていく過程」⁽¹²⁾のことである。

ジンメルは、支配者の一方的な作用と理解されているものでも、服従者の自発性と協力性とはかならずあるとし、それを明らかにすることは、社会学的な現存の分析にとってきわめて重要であるとした。そこでとくに、自由がおしつぶされているようにみえる「權威」と「威信」をとりあげて、そのなかに隠蔽されている自発性と協力性を明らかにしようとした。

第二節 「權威」と「威信」について

權威 (Autorität) は、実際には、服従者の自由を、ふつうに認められているものよりもより高い程度で前提にしている、服従の強要や強制にもとづいていのではないとされている。「權威」ということばを調べてみると、個人・集団・制度などの主体の優越的価値が社会的に承認、形式的に固定され、それによって主体の意思決定を他者に承認させうる能力⁽¹³⁾となっている。

そこで、ジンメルは、どんなばあい⁽¹⁴⁾に權威が生じるかをつぎの二つに分けて説明している。一つめは、重要性和力とがすぐれた人物が周囲の人びとの信用と信頼をえ、それによって服従者としての自発的な協力性があらわれたばあいである。これは、まず最初に社会のなかで重要性をもち、力のすぐれた人物の存在がある。つぎにその人物にたいし、周囲が自発的に信用や信頼をむける。それによって服従者の自発的な協力性がみられるとともに、その人物の意思や決定は、より客観的な、規律的なものとされ、權威になる。つまり、權威はある程度立派な人物を周囲が盛りあげることによって生じるものであり、個人的な価値からの偶然的な発生と考えら

れている。また、ある人物がその個人的な価値を用いて權威的に行動すると、その価値の別の重要性が、さらに周囲の信用と信頼を獲得するようになる。ジンメルはこれを、重要性の量が質に変化するからだ⁽¹⁵⁾と述べている。

二つめは、超個人的な潜勢力 (国家・教会・学校・家族・軍隊の組織など) によって、個人が、尊敬や威厳や最高審のもつ決定力を身につけたばあいである。これは「虎の威を仮るきつね」ということわざに象徴される。たとえば、教会の牧師のばあい、彼の權威は彼のうしろにある神によってさええられている。神という超個人的な価値を認める人びとの存在によって、ただ神の媒介者であるにすぎない牧師に価値が与えられ、個人的な価値に変化してしまうのである。この超個人的な価値から權威が生じるばあいのほうが、權威の本質とされている。

この二つのパターンをみるかぎりにおいても權威は服従する人びとの自発的な協力性を必要とする社会学的なできごとだといえる。

威信は、純粹に人格の要点から生じ、威信による優越性の本質は個人と大衆の「感動」、つまり、無制約的な服従である⁽¹⁶⁾とされている。「威信」ということばは、ある社会的存在の価値的屬性 (地位・職業・収入・財産・資質・生活様式な

ど) についての他者によって承認された差別的評価や、他者の尊敬や賞賛・信服の感情的反応にもとづく社会的勢力・心理的強制力と説明されている。まさに、権威と同様、他者が主体を人格的により高いものと認めることをも含めた自発的な服従から生じるといえる。

この「権威」と「威信」から、表面上は、まったく一方的だと思われる関係にも逆からの作用が存在していることがわかる。ジンメルは、その例として、「演説家」や「教師」、

「ジャーナリスト」をあげた。演説家は、その聴衆が彼にたいし、自分たちのニーズを満たす演説を求めているといった作用に操縦される。教師のばあいも、生徒の反応を無視した授業はありえないため、生徒の反応が教師を操縦しているといえる。ジャーナリストも、多数者の傾向のあるところ、彼らの聞き確かめようとしているもの、導かれようと願っている方向などに、あくまで耳を傾け、それらをむすびつけ、察知しなければならぬと述べられている。このように、多数者の興味・関心などから生じるニーズによって、ジャーナリストも操縦されているのである。

以上のことから、支配と服従の関係には、きわめて複雑な相互作用がかならず存在しているといえる。支配と服従の関係が相互作用の関係として考えられるということは、その支

配と服従の関係(支配関係とする)を社会学的なものと認めることができることをしめしているのである。

註

- (1) G・ジンメル著、一八九〇、一九〇八、居安正訳、『社会分化論 社会学』、(現代社会学体系一)、一九七〇年、青木書店、二三〇ページ。「意志」とあるが、本論ではすべて「意思」とする。

(2) 同右、二三〇ページ。

(3) 同右、二三〇ページ。

(4) 同右、二三〇ページ。

(5) 同右、二三〇ページ。

(6) 同右、二三一ページ。

(7) 同右、二三一ページ。

(8) 同右、二三一ページ。

(9) 同右、二三一ページ。

(10) 浜島朗・竹内郁郎・石川晃弘編、『社会学小辞典』、一九八二、有斐閣、一四五ページ。

(11) ジンメル、前掲書、二三二ページ。本論では「協力性」とする。

(12) 浜島朗他、前掲書、一四四ページ。

(13) 同右、九四ページ。北川隆吉監修、『現代社会学辞典』、一九八四、有信堂、六一五ページ。

(14) ジンメル、前掲書、二三二ページ。

(15) 同右、二三三ページ。

(16) 浜島朗他、前掲書、一一ページ。北川隆吉、前掲書、六一五ページ。

(17) ジンメル、前掲書、二三四、二三五ページ。

第二章 個人支配

第一節 集団の統一化

ジンメルは、個人にたいする集団の統一化のあらわれ方として、つぎの二つをあげている。⁽¹⁾一つめは、支配者である個人に同感して統一化がおこるばあいである。そこでは、支配者と服従者とは同じ意思をもっていて、両者とも同じ方向にむいて統一されている。

この共通な意思からの統一化は、さらにきわめて異なる出発点をもっている。つまり、集団がさきに存在しているのか、個人がさきに存在しているのかということである。ジンメルは、宗教を例にとって、前者を民族宗教、後者をキリスト教で説明した。⁽²⁾前者の民族宗教では、さきに統一された民族があり、その民族が神、つまり支配者をみいだすことによってさらに統一化を進めるのである。クラブやクラスで代表

者やかかりなどを選ぶばあいも同様である。まず、ある程度、統一された集団があり、より統一化を進めるために、その集団のなから集団を象徴するような共通の意思をもった支配者を捜した。逆に、青年団や婦人会などが、なにかを継続的に教えてもらうために、彼らを支配する指導者を集団の外部から連れてくるばあいもある。これより、集団が統一化をより進めるために支配者を求める時、その集団の内外を問わないといえる。

後者のキリスト教は、イエス・キリストという神にたいして人びとが集まり、それが集団として統一されたものである。このことは、キリスト教のみならず、仏教など世界宗教と呼ばれているものすべてにあてはまる。宗教以外にも、習いごとの教室の先生とそこに通っている人びととの関係をあげることができる。人びとは、その先生を選んで集まってくる。はじめは、先生を中心にして一対一の関係でしかない。しかし、やがてその先生を先頭に、同じことを習っている集団としての統一が生じてくるのである。

こうして支配者への同感で統一された集団は、きわめて従順に服従すると思われる。

つぎに二つめは、個人に反感を抱き、対立するかたちで統一がおこるばあいである。たとえば、A国とB国の戦争のば

あい、A国のそれぞれの人びとは、Bという国全体をまとめたものにたいして、まさに敵対するかたちでより強く統一される。ここで、A国とB国との間にはなんら支配関係はない。しかし、ジンメルは、共通な敵対者が、共通な支配者でもあるばあい、集団の団結はいっそうはなはだしいものになると考えている。これは、資本家と労働者の関係を例にあげることができる。労働者にとって資本家は使用者であり、支配者である。それとともに、労働者の集団である労働組合にとっては敵対者になる。そこで、労働組合は、上位にある資本家と少しでも対等に競争するために、より強固に統一しようとするのである。

これらの、集団に統一化をもたらす前提になる二つのパターンは、まったく両極に位置しているといえる。そして、現実の統一化はこの両極間を行ったり、来たりし、そのバランスのなかでもたらされる。エーリッヒフロムは『自由からの逃走』（一九四一）のなかで、人は自由を与えることを求め、徐々に自由を獲得していく。だが、ほんとうにすべてが自由になった時、人は逆に、孤独感が募り、不安になり、せっかくな自由から逃れようとする。それでも自由が奪われていくと、また窮屈だと感じるようになり、自由をえたいと思うようになると考えている。フロムは、人は自由の要求と

自由からの逃走を繰り返すことによって平衡を保っているとした。

同様に、ジンメルも、共通の方向性をもつ指導者によって支配されることを望む「牽引」と、指導的な権力にたいする「反発」という二重の関係が、服従原理の内面に存在することによって、服従者が服従者としての正しい位置を獲得すると述べている。

ところが、ジンメルは、この牽引と反発がかならずしも集団の統一化をもたらすとはかぎらないと考えている。牽引による集団の分裂化には「嫉妬」⁽⁴⁾があるとされる。とくに、共通に引きつけあう者が共通の支配者であるばあい、集団の成員は嫉妬によってより決定的に分裂する。たとえば、支配者と集団が同じ意思をもち、支配関係が存在しているものがあるとすると、そのなかで、集団の成員の一部が他の成員より多くの支配をうけたいと思い、支配者を引きつけようとする。こうなれば、他の成員は統一されてきた時のような仲間ではなく、相互にライバルになる。逆に、支配者が集団の成員の一部を引きつけようとした時も、他の成員がそれをねたみ、引きつけられた成員は、さらに優位にたとうと努力する。こうして、支配者と服従者の相互関係と、服従者間の嫉妬による相互作用によって、集団はよりいっそう分裂してしまうの

である。

反発による集団の分裂化も、牽引と同様、支配者が集団を圧迫しようとした時、それに対抗して統一化の方向に進むはずの集団が、逆の方向に進むことである。前に述べたように、集団への共通な圧迫は、ある程度までなら、その圧迫に反発しようとする外面的な統一や内面的な統一をもたらす。しかし、一定の限界を越え、集団の成員を強制的に接近させることによって内的な距離が縮みすぎ、ほんらいならば、おおめにみていられるような点でも許すことができなくなるのである。

こうして、個人支配によって分裂した集団を再び統一しようとする時、より高い権力である「上級審」⁽⁵⁾に頼るとよいとされている。上級審が存在しないところでは、集団間の力の量の直接的な優劣だけが大きな問題となり、統一化が進みにくい。しかし、すべての相互作用のなかには、上級審が、どんなかたちでかはまったくかわらずに、含まれている。そして、そのような上級審の存在が、形式社会学の点からとらえるための重要な特徴とみなされている。⁽⁶⁾

この上級審は支配者でなくてもよい。利害関心や本能や感情にもとづく拘束・論争のばあい、上級審は知識人や代表者、非論理的で矛盾しあう観念のばあい、上級審は論理であ

るように、もっぱら知性の側面だけであると述べられて⁽⁷⁾いる。分裂している集団が再び統一されるのは、両者とも、統一可能な新しい状態に変形されるか、新しい性質が発達する⁽⁸⁾のである。そして、そうさせることができるのはやはり上級審なのである。ゆえに、ジンメルは、このように分裂した集団の再統一化のばあいにおいて、上級審に大きな重要性を与えているといえよう。

第二節 統一化の形成

ジンメルは、ある支配者によって統一されている集団の形式を「平準化」と「等級化」という二つに分けて述べて⁽⁹⁾いる。支配者にたいして、服従している集団がまったく平等であることが集団の平準化である。これには、支配者が服従者を平準化するばあいと、平準化した服従者が支配者を生むばあいとがある。どちらにしても支配者は、無条件な卓越性をもっており、中間的な身分は、けっして置かれていない。なぜならば、その中間的な身分の者への反抗は、いとも簡単に一番上の支配者を巻き込むからだ⁽¹⁰⁾とされている。ゆえに、服従者は同質にしておかねばならないのである。いくら性質や傾向が同じであっても、いくつかの階層に分かれているばあ

い、上位への反抗が徐々に上に昇り、支配者への反抗につながりやすい。そこで、本質的な性質が多様であってもそれを有機的に編成せずに、そのまま並存させておくことが大切なのである。また、平準化のレベルはあまり高いと危険であると同時に、あまりにも低すぎると支配者としての意義を失うことになる。

集団を平準化している例としては、宗教、家元制度、家父長制度など、概念によって支配者に卓絶性が与えられ、統一されるばあいあげられる。個人に卓絶性を与えるものは概念なのだから、段階をつくって概念を分配するよりも一つにまとめたほうが服従する側としては理解しやすいし、統一化がはかりやすいのである。

ところが、ほんらいは平準化であるが、表面的には反対にみえるばあいがある。それは、支配者が服従者に、気ままにそれぞれ違った特権を与えるばあいである。この特権が広範囲な内容をもつにもかかわらず、力のおよぶ期間が短いこと、法的な優位性にはかならず制限があることによって服従者は特権に引きつけられて支配者により一様に服従するといった平準化の傾向をあらわす。

個人支配では、なぜ一人が多数を支配できるのかという疑問がかならずある。ジンメルはこの疑問にたいし、支配者は

その関係に全人格を投入しているが、服従者は人格の一部だけを投入しているにすぎないと考えた。服従者の人格の一部が集まったものが「大衆」とみなされる。実際には、人格は「全体」や「一部」といった数学的に把握できるものではない。しかし、相互作用すべてにおいて人格の分化は、一般的に考えられるものである。

服従者は、大衆を構成する側面と、個人的な自由にゆだねなければならぬ側面によって全人格をつくりあげている。そして、この大衆を構成する側面と支配者の全人格の割合の違いが、集団形成の特徴的な違いである。

二つの割合に作用するものが「服従している圏の大小と、人格が分化している程度⁽¹⁾」である。圏が大きいほど、大衆を構成する部分が少なくなるし、人格の分化が進んでいるほど、従属者のなかでの矛盾や不均衡が生じにくい。つまり、少しの大衆を構成する部分が、服従者のなかで完全に分化されている時、支配者はより多くを相互作用関係として支配することができ。服従者は、人格のわずかな側面しか用いないことによって支配者を越えることは絶対にないのである。

つぎに、集団をピラミッド型の形式にする等級化について考えてみる。これも平準化と同様に、支配者が集団に権力をすべりおとし、近くにある者ほど多くの権力をもつようにす

ることで等級化するばあいと、集団の一部がより大きな権力を持ち、さらにその一部がまたより大きな権力をもつという繰りかえしから支配者である個人が生じるばあいがある。前者は上から下への等級化、後者は下から上への等級化といえるが、とくに前者をつぎの二つに分けている。一つめは、「個人の独裁的な権力の充溢から」⁽¹²⁾の等級化である。たとえば、動機は異なるであろうが、教師の力があまりにも大きい学級集団を、生徒どうしの自主的な活動の盛んな集団にしようとするばあい、学級委員やその他のかかりをつくって等級化し、教師の権力をすべりおとすことによって教師の力を弱くする。これは、ほんらいならば、支配者の権力が弱化することによって生じるのである。

二つめは、支配者の権力が「拡大・強化」されることから生じる「支配者の意図」⁽¹³⁾による等級化である。この例として、江戸時代の身分制や、会社における社長から平社員にいたる階級制があげられる。下層者である服従者は平準化の時と同様に人格のわずかな部分で服従すればよいのである。しかし、等級化は平準化よりも全体の構造をより強固なものにする。なぜならば、支配者のもとに集まろうとする力は近くにいる者のみならず、階層をへることによって遠くの者にまでみいだすことができるからである。この支配者に集まろう

とする力は表彰や報酬、昇進といったプラス・アルファの要因によってより強化され、支配者の力はよりいっそう大きなものになる。もう一つ、構造の強固性に寄与しているものは、人びとが自分たちの下にいる者をみて、もっぱら現存の地位の維持に努めようとすることである。支配者も、つねに彼らに「上をみて暮らすな、下をみて暮らせ」ということによって上位にいかうとする意思をあやふやにし、等級化をより強化する方向にむける。

上から下への等級化がとくにもっていると思われる大きな問題は、「それぞれの地位に適した人物を認識すること」⁽¹⁴⁾ができるからである。実際に、その人物をその地位に置いてみて、はじめてわかるものであるために、「先天的な困難」⁽¹⁵⁾だと述べられている。

後者の下から上への等級化は、「経済的な領域」や「政治的な領域」、「知的な教養的な領域」、「軍事的な組織の原初的な出現」⁽¹⁶⁾などあらゆるところでみられるとしている。

さらに、上からと下からの両方より同時に等級化されるばあいがある。この時、最高と最低の間に位置する者は、支配され、服従されることから、支配者に依存することと独位することとの二義性をもつと考えられている。この等級化は、成員の多い集団の配列形式と生活形式に属するといえ、いく

らか機械的になされると述べられている。⁽¹⁷⁾ そのため、人物は地位の重要性から独立し、また、おのおのの重要性が、全体とすればどうなるかは問題とされない。

しかし、ジンメルは、集団の成員はこの二義性によって「社会学的な生活感情を規定」し、これが「集団の団結の緊密性と強固性として、全体に反映する」⁽¹⁸⁾と述べている。

一方からの形式の確定は、個人的な質的な性質をもつ。しかし、二義性により生じる支配と服従はそれ以外に客観的に形成され、社会学的な地位としてはより一義的で、確定されたもので、大きな凝集価値をもっていると考えられている。⁽¹⁹⁾

第三節 支配者と集団の関係

集団が、その成員からみた仲間や部外者を支配者とするばあい、そこには、どういった理由が考えられるのであろうか。ジンメルは、「合目的性という合理的な理由」⁽²⁰⁾だけでなく、「本能的で感情的な動機」と「抽象的の間接的な動機」をつけ加えて考えた。

仲間は、集団にたいし、理解をもち、心理学的に同等で、集団を強化、安静にするなどの性格を、部外者は、不遍性をもち、心理学的に対立し、集団を補い、鼓舞、刺激するなど

の性格をもつ。反面、仲間は、退屈で余計なものと感じられ、部外者は、敵意を生み、集団との比較を不可能にする。また、前者は、低すぎる課題を、後者は、高すぎる課題を提起することによって、集団からしりぞけられると述べている。⁽²¹⁾しかし、どちらを選んでも、それぞれのなかで、同質なものとの牽引と異質なものとの反発の相互運動と組合せから生じる内面的な関係は多様であるといえる。

つぎに、特殊な問題としては、服従のもたらす屈辱は、支配者が仲間のばあいと部外者のばあいとは、どちらがより堪えられるかがあげられる。全体としてより低位にあり、個々の成員が服従することになれているばあいほど仲間による支配をしりぞけ、逆に、高位にあるばあいほど仲間による支配を受けいれようとする。この集団が支配者を選択する要因には感情だけがあげられ、合理的に考えることはできない。

支配者が仲間であるか、部外者であるかは、両極に位置づけられることである。ジンメルは、こうした両極をあげるものではないが、支配者と集団の関係について、あと三つの点を述べている。一つは、支配・服従関係だと思われるようなものが、厳密には、対等な関係であったり、対等な関係だと思われるようなものが、厳密には、支配・服従関係であったりするということである。とくに前者は、対等な関係である

のに成員に服従的な地位に落ちたように感じさせ、こうした関係を結ぼうとしない状況をしばしば生むとしている。

もう一つは、上級審を求める複数の集団の關係は、かならず対等でなければならぬということである。支配關係が存在しているばあい、上級審は上位の集団に引きつけられる。これより生じた「階級的な共感」は、「主体の思维と感情の全体」とにびったりとくっついており、「先天的な」要因となる。そのため、あたかも平等に判決していると思ひこまれやすい。反面、上位の集団に引きつけられないように意識することは、ある限度を越えて、反対の状況を生む恐れがある。

最後に、支配者の勢力が集団にたいして高ければ高いほど、集団の成員間に對等な關係が引きおこされることである。これは、支配者による平準化のなかでしめされたことの繰りかえしである。

第四節 現実の社会の支配關係

ジンメルは、個人支配を支配・服従關係すべてにおける一般的で根本的な形式とした。そして、その個人支配のなかで、牽引による統一化と反発による統一化、集団の平準化と

等級化、仲間である支配者と部外者である支配者について説明した。

その三つすべてにいえることは、それぞれの概念はまったく兩極に位置するものであるということだ。現実の支配關係は、兩極の間を行ったり、来たりして平衡を保とうとしている。たとえば、完全にどちらかの極に位置すると思われるような支配關係のばあいも、少し視点をかえてみるとまったく反対の極の性質をみつけることがある。これは支配關係のみならず、すべての社会学的な關係にいえることである。そのため、それぞれの支配關係の特徴は、兩極をなす概念が含まれている割合からうかがわねばならない。

兩極にあいはんする概念をもったものを一本の棒と考えると、ここでは、三本の棒があげられている。この棒の上に現実の社会の支配關係が存在しているのだが、少くともここにある三本の棒の組合せによって、三次元の空間のなかに位置づけられるといえる。

ジンメルは、棒を三本あげたが、現実にもみられる支配關係は、もっと細かい多くの棒をもち、その棒による多元的な空間のきわめて複雑な位置に存在していると思われる。

註

(1) G・ジンメル著、一八九〇、一九〇八、居安正訳、『社会

分化論 社会学』、(現代社会学体系一)、一九七〇、青木書

店、二三九ページ。

(2) 同右、二三九〜二四〇ページ。

(3) 同右、二四二ページ。

(4) 同右、二四四ページ。

(5) 同右、二四四ページ。

(6) 同右、二四四〜二四五ページ。

(7) 同右、二四五ページ。

(8) 同右、二四五ページ。

(9) 同右、二四六ページ。

(10) 同右、二四七ページ。

(11) 同右、二五二ページ。

(12) 同右、二五五ページ。

(13) 同右、二五五ページ。

(14) 同右、二五八ページ。

(15) 同右、二五八ページ。

(16) 同右、二五九ページ。

(17) 同右、二六〇ページ。

(18) 同右、二六一ページ。

(19) 同右、二六一ページ。

(20) 同右、二六六ページ。

(21) 同右、二六六〜二六七ページ。

(22) 同右、二七一ページ。

(23) 同右、二六二ページ。

引用文献・参考文献

G・ジンメル著、一九一七、阿閉吉男訳、『社会学の根本問題

——個人と社会——』、一九七二、社会思想社。

G・ジンメル著、一八九〇、一九〇八、居安正訳、『社会文化論

社会学』、(現代社会学体系一)、一九七〇、青木書店。

浜島朗・竹内郁朗・石川晃弘編、『社会学小辞典』、一九八二、有

斐閣。

北川隆吉監修、『現代社会学辞典』、一九八四、有信堂。

阿閉吉男編、『ジンメル社会学入門』、一九七九、有斐閣新書。

阿閉吉男著、『ジンメル社会学の方法』、一九七九、御茶の水書

房。

新明正道監修、『現代社会学のエッセンス』、(べりかん・エッセ

ンス・シリーズ)、一九七二、べりかん社。

八木正著、『社会学的階級論の構造』、(社会学叢書)、一九七八、

恒星社厚生閣。

(社会学科学生、星ゼミ)